

田村俊子という雑誌編集長

—『女聲』掲載・宮沢賢治「注文の多い料理店」の役割—

母 丹

はじめに

宮沢賢治の代表作の一つである「注文の多い料理店」は、一九四〇年代から中国語に翻訳され、受容されはじめた。その最初の訳文は、田村俊子が創刊した華字婦人雑誌『女聲』第二卷第八期（一九四三年十二月）に掲載された陳緑妮¹訳の「定件繁多的館子」である。その訳文の掲載事情については、台湾の研究者、頼怡真がすでに二篇の論文²において考察している。頼氏曰く、賢治作品は戦時下において「滅私奉公」や「戦意高揚」を促す「道具」として日本軍国政府に意図的に利用されていた³。しかし、『女聲』に掲載されたのはむしろ「戦争や帝国主義への反感」という読みの可能性さえ含む「注文の多い料理店」であり、その原因として考えられるのは、『女聲』の主要な編集者の一人、関露という、日本と汪精衛政府の情報を集める目的で中国共産党から送られてきたスパイの存在であるという。田村俊子は中国語ができないため、編集のほとんどを行ったのは関露であり、彼女は自身の政治的目的から、戦争協力を極力排除したプロパガンダ色の薄いものばかりを掲載作品に選び、日本の文学作品もその例外ではなく、関露の関与によって、日本帝国主義のプロパガンダ雑誌だった『女聲』は、「ひそかに抗日運動のための地下舞台ともなった」と頼氏は指摘する。

頼氏の論は、『女聲』に関する先駆的な研究として評価できるが、現在からみるといくつか考え直す余地がある。まず俊子の言語能力について、中国語が少しできると証言する人もいる⁴。関露が「中国語のできない」俊子に代わって編集を取り仕切ったという説は必ずしも全面的に首肯することができない。また、関露は英語・ロシア語の文章を翻訳できるほどそれらの言語に精通している⁵が、日本語には疎い⁶と考えられる。関露は一九四三年八月、田村俊子の指示で第二回大東亜文学者大会に出席したが、参会の様子を記録した「東京寄稿（一）（二）」（『女聲』第二卷第五期、一九四三年九月）において、日本語のできない自分にあった出来事を五つも記している⁷。また、こうした本人の発言のみならず、第三者である会田綱雄も草野心平との対話において、『女聲』の人生相談欄——「信箱」に書かれている質問に解答する田村俊子の姿について、「英語に翻訳してもらい、真剣に考えて、例のカナダなまりの英語で、かんで含めるように言って、関露に中国文にさせてるんだな」⁸と回想しており、田村俊子と関露は英語で交流していたことが

わかる。したがって、関露は日本語ができず、「注文の多い料理店」の原文をそのまま読むことができなかった可能性が高いと判断するのが妥当であろう。「注文の多い料理店」の掲載は女聲社内唯一の日本人であり、雑誌の編集長でもある田村俊子によって決められたと考えたほうがむしろ自然である。俊子は宮沢賢治という作家を、草野心平を通じて知った可能性が高いが⁹、本稿では、「注文の多い料理店」が『女聲』に選ばれた必然性を、『女聲』編集長田村俊子の側から探ろうとするものである。

一 一九四三年までの中国における宮沢賢治受容

周知のように宮沢賢治は生前はほぼ無名で、死後（一九三三年）から急速に有名になり、作品が広く読まれるようになった。一九四〇年代になると、彼の作品はさらに海を渡り、中国にももたらされた。一九四三年発表の「定件繁多的館子」よりも前に、中国において翻訳された宮沢賢治作品は、まず次の二つである。

・白樺訳「日本現代詩選譯特輯③——宮澤賢治五章（「鎔岩流」「停留所にてスキトンを喫す」「異途への出発」「原体剣舞連」「もうはたらくな）」（『華文大阪毎日』一九四〇年十二月）¹⁰

・銭稻孫訳「北国農謡」（「雨ニモマケズ」）（北京近代科学図書館『日本詩歌選』収録、一九四一年四月）

日本における宮沢賢治文学の受容は、童話より詩から始まった。一九四〇年代初頭の中国における宮沢賢治受容の歩みも、日本のそれと一致しており、上に示した最初の二つの翻訳作品は共に詩であり、中でも「雨ニモマケズ」は、賢治を「一般的に有名」¹¹にした。

詩の次に中国語訳が出されたのは季春明訳の童話『風大哥』（「風の又三郎」）である。日本において「風の又三郎」は一九三四年『宮沢賢治全集』（文圃堂書店）に収録され、一九三八年に演劇として上演された。また、翌一九三九年に羽田書店より単行本として出版され、一九四〇年十月には映画として公開されるなど非常に大きな注目を集めていた。さらに映画「風の又三郎」は海を渡り、一九四〇年十一月に満州でも上映されており、それから一年後に、同じく満州に属する新京に「風の又三郎」の中国語訳『風大哥』が出版されたのである。

以上のように、「詩五章」、「北国農謡」（「雨ニモマケズ」）、『風大哥』（「風の又三郎」）は、いずれも当時の日本で有名な賢治作品だった。そして四番目に中国語訳が出された「注文の多い料理店」は、賢治が生前自費出版した唯一の童話集『注文の多い料理店』¹²の表題作であった。やはり賢治作品の中で名が知られており、しかも、これまでに中国では訳されていなかったことも、この「注文の多い料理店」が『女聲』に掲載された理由の一つだと考えられる。

しかしながら、同時代における環境の要因だけでなく、田村俊子自身の思想と、「注文

の多い料理店」に含まれる読みの可能性との間にも、いくつかの興味深い接点がある。その点について次に述べていきたい。

二一 「注文の多い料理店」の読まれ方

「注文の多い料理店」は複数の解釈可能性を持つ小説である。すでに広く知られている賢治の自解が次である。

二人の青年神（「紳」の誤植）土が猟に出て道を迷ひ「注文の多い料理店」に入りその途方もない経営者から却つて注文されてゐたはなし。糧に乏しい村のこどもらが都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まらない反感です。¹³（下線は稿者、以下同）

上記の作者自解では「農村―都会」という二項対立の図式が明確に示されている。従来、本小説はこの作者の言を踏まえつつ、次に示すような①～③の二項対立図式によって把握されてきた。

①「農村―都会」：金銭主義、権威志向、西洋志向を持つ軽薄で空虚な紳士に代表される都会文明への批判¹⁴

②「日本―西洋」：「農村―都会」の拡大図。土着すなわち伝統を捨て、盲目的に西洋に追従する近代日本社会への批判¹⁵

③「自然―人間」：趣味本位で狩猟や殺生をし、肉食に執着し、生命を尊重しない紳士が自然に罰せられるという風刺¹⁶

以上の三つの図式のいずれにおいても、よく論じられるのは「山猫」の所属である。山で暮らし、都会の紳士に罰を与える山猫は一見すると村のこどもらの味方である。しかし、ナフキンをかけ、ナイフを持って西洋料理を食べようとする山猫自身の生き方は都会的・西洋的でもあり、また残酷さや間抜けさを併せ持つところから、紳士との共通点も多く見受けられる。山猫は二項対立の片端には収めきれず、この図式においては両義的な存在と言える。¹⁷

また、「すつかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のやうな犬を二疋つれ」ている紳士の姿から、戦争、侵略、帝国主義などを連想するのもまた一つの主流な読みである¹⁸。このように複数の読みの可能性を持つ「注文の多い料理店」を田村俊子が読んだと思われる時期は、賢治の名が上がった一九三三年から、「注文の多い料理店」の訳文が『女聲』に掲載された一九四三年までの十年間だと考えるのが妥当であろう。この十年間は、戦争前夜と戦時下の期間と重なる。「注文の多い料理店」という小説が、この特殊な歴史的コンテクストに置かれ、田村俊子という読者・編集長に出会うとき、ある相互作用が生じたと考えられる。それを次に詳述する。

二一 田村俊子という読者

五十嵐淳は、「人間がみな自分の中に「紳士」を抱えている存在であることを自覚させる」¹⁹と、「注文の多い料理店」を読む意味を語っている。確かに読者のわれわれはみな「紳士」を抱えているが、その中の一人、田村俊子の中にある「紳士」の要素は、実に大きいものであったと考えられる。

「あきらめ」（一九一一年）、「木乃伊の口紅」（一九一四年）、「炮烙の刑」（一九一四年）などを代表作とする田村俊子は、独特の官能的な筆致で明治末～大正期に活躍した作家であった。また、その作風とも一致するかのように、自身も借金をしてまで華美や贅沢を求める浪費家であったことは知られている²⁰。すなわち、俊子は、「村のこどもら」の「反感」を受ける「都会文明」を反映し、「放恣な階級」に属する人物と把握することもできるのである。

たとえば、俊子は最初の夫である田村松魚と別れ、一九一八年鈴木悦を追ってバンクーバーへ向かったが、「最初は斯うした人々（稿者注：日系移民たち）に近付かず讀書ばかりしてゐた」。またそのとき同棲していた鈴木悦はカナダ人に排斥されがちな日系移民のために組合運動を起こしていたが、俊子は「周囲に對して高踏的で、移民地の空気には親しめ」ず、「無関心で、彼れの仕事を傍觀してゐた」²¹。かつて文壇の寵児だった彼女は、日系移民の苦難を目撃しながらも、はじめのうちは移民地の人々との交渉や鈴木悦の主宰する組合運動とも一定の距離を置いていた。「傲慢」とまではいかなくとも、俊子自身の言葉を借りると「高踏的」なところがあつたと言えよう。

また、一九三六年に帰国した田村俊子は、丸岡秀子という、農村婦人運動家と親友になった。しかし、丸岡秀子は農村婦人とはまるで対極的な俊子のあでやかな暮らし方を不満に思い、それに対して批判的な姿勢をとっていたことを述べている²²。そこでは、金銭的な余裕のない俊子が、新しい大島の裕を手に入れるために丸岡秀子に至急で大金を貸して欲しいと頼んだエピソードも明かされている。丸岡は親交が深まるにつれ、俊子の浪費ぶりは作家としての内面の枯渇をまぎらすためのものだ気づいたが²³、たとえ内心において葛藤があつたとしても、外面を着飾る俊子と「注文の多い料理店」における派手な「イギリス兵隊の形をして」、高価な犬を連れる二人の「紳士」とは似通っていると言えよう。

三 田村俊子と「山猫」

さらに、晩年の田村俊子は「紳士」から「山猫」にも似て、両義的な存在となつたと把握することもできる。

たとえば、俊子はカナダでレーニン革命により、「思想の上に新らしい灯」²⁴——社会主義の思想²⁵を獲得した。その思想や鈴木悦の仕事に影響され、田村俊子も一九二〇年

代の半ばから、移民労働者組合運動に飛び込み、主に婦人労働者運動に力を注ぎ、労働者の味方となった。しかし、にもかかわらず、帰国後、相変わらず浪費家の一面を持ち合わせていたことは先に確認した。さらに、一九三八年十二月中国に渡った直後²⁶の彼女も、六国飯店や北京飯店のような一流ホテルに住み、華美な服装に身を包んだ。俊子のこのような矛盾は「山猫」の両義性と通じていると言えよう。

その後、食い詰めるようになってしまった俊子は汪精衛南京政府宣伝部及び太平出版印刷公司²⁷の顧問に就任した草野心平を訪ねて、華字女性誌『女聲』の創刊の話にたどり着く。

俊子は、一九四二年二月までは積極的に日本側の雑誌に寄稿していたが、『女聲』創刊後（一九四二年五月）の寄稿は、一九四四年二月の「日華の演劇に就て」という久保田万太郎との対談のみとなっている。このことから『女聲』創刊後、彼女のエネルギーはもっぱら雑誌の経営に向けられていたことがうかがえる。以前からの夢である、婦人のための雑誌を作りたい²⁸という仕事に身を投ずることにより内心の空虚が満たされていたためか、晩年の俊子の浪費家の性質はかなり薄らいだように見える。俊子の死後、多くの人々が彼女を偲ぶ文章を書いているが、彼女の晩年は草野心平に「實に見事な戦闘だった」と評された。その生活ぶりは「リフトもない四階の、そこまであがる薄暗い蜘蛛の巣やつばや紙屑のステップを踏みながら六十を越したおばあちゃんが毎日ここをあがつたり降りたりそして獨りで自炊をやつてゐた」²⁹ものだった。また阿部知二は俊子が「強権に阿諛するような藝當は出来ず、好もしくない人から援助を受けることをいさぎよしとしなかつた。それが上海で彼女を次第に窮迫の状態に追いこんで行つた」³⁰と回想している。

彼らの回想に基づけば、晩年の俊子が粗末なアパートで貧乏な暮らしをしており、しかもその貧窮は彼女自身による選択であったことがわかる。このような俊子の変貌は「紳士」や「山猫」性からの脱却の試みだったととらえることができよう。

俊子が自分と「山猫」との共通性にどこまで気づいたかは不明であるが、贅沢を好む都会から来た「紳士」との共通点と合わせると、彼女にとって「注文の多い料理店」は非常に興味深い作品であったと考えられないだろうか。

四 田村俊子と戦争

『女聲』は最初にも述べた通り、戦時下に刊行された媒体であるが、戦争に対する田村俊子の態度は、実に明瞭であった。俊子は多くの場合において、戦争に対する嫌悪を表明している。北米時代では「今のあの極端な日本のミリタリズムは考へてもいやです」³¹と明らかな戦争への反感を語り、帰国後（一九三六年）は厳しい言論統制に遭ってしまったが、日本の民衆にとっては「考へたつて仕方がない」という時代が来て、そのような時代は「暗黒を思はせる」³²と書いたり、学生は「勉強しても仕方がない」と云ふ不安に脅かされ、「いろ／＼な意味で、受難時代」³³に置かれていると述べたりして、遠回しな物言いには

なっているが、戦争に対する批判は変わらなかった。こうした雑文のみならず、田村俊子の作品の中にも、転向することを激しく拒む一人の若い無産革命家を描いた「昔がたり」（一九三七年）や、農夫にとって唯一の生活の協力者である馬まで戦場に徴発されるようになった時代を、何気なさを装いながらも痛烈に批判する小説「馬が居ない」（一九三七年）などがある。また、関露や阿部知二に対しても、「また文化が壊されてしまったわ」³⁴、「何ていやな戦争なんだろう」³⁵というように、戦争に対する反感を露わにしている。

ただし、軍事領域に止まらぬ戦争のもう一つの側面——文化侵入に対する態度には、俊子の中で大きな変化がみられる。一九三九年三月、渡中したばかりの田村俊子は「日支の新文化工作が内地で頻りに云々されてゐるにも拘はらず、支那大陸に現在進出しつゝあるものは最も非文化的な面ばかりである。何う云ふ非文化的な面かと云ふことを、こゝに委しく叙述するわけには行かないのであるが、日本文化を支那大陸に移植する使命を持つものの中に当然婦人も加はらなければならない」³⁶と述べており、軍事領域の戦争を遠まわしに責めながらも、日本文化の中国移植には賛成していた。ところが、中国滞在が長くなるにつれ、俊子は次第に中国という土地に愛着を覚えるようになった。それは随筆「支那趣味の魅力」（『満州日日新聞』、一九四一年九月～十月）において最も端的に表れている。この随筆において、俊子は自分が「骨董」「演劇」「硝子絵」をはじめとする中国の「卑俗」な伝統文化に対して、はじめのうちは「古臭い」「近代的な生命はない」と思っていたが、二年半北京で暮らした後、次第にその味が身に染みてくるようになり、その「卑俗な趣味」から、「純粋なもの」を感じ取り、「一種の愛情」さえ覚えるようになったと書いている。さらに、結末の部分において、俊子は「北京にゐれば何もかもが骨董だといふ感じの中に安住してゐると、政治性を含んだ日華文化交流問題などについて考へたりすることは、全くいやになる」と正直に自分の意見を述べている。およそ三ヶ月後に書かれた「北京から南京まで」（『満州日日新聞』、一九四二年一月～二月）においても、「日華人の間の親和とか提携とかは一つの結合の機会によつて自然に両者の間からしみでてきた感情でなければ、ほんたうのものではない。政治とか文化とかでいろ／＼な機構の上に強ひて机を並べて見ても、思想を一つにしようとか同じ考えで進もうとか言葉だけで約束して見ても、それだけで感情の融合は生まれてこない」と類似した態度を示している。つまり、自分と中国との感情の融合を実際に経験した俊子は、「中日文化協会」³⁷をはじめとする文化工作機関が宣伝する「政治性を含んだ日華文化交流」に反感を持つようになった。この時点において、俊子は軍事領域の戦争のみならず、文化侵入に対しても非協力的な態度を示し始めた。こうした彼女の態度は、無論その後（一九四二年五月）に創刊された『女聲』の理念にも影響してくる。

『女聲』は評論、世界知識、婦人と職業、修養、所見所聞、衛生、娯楽、文芸、家政、漫画、戯劇と映画、散文、児童欄、美容、新装などで構成される、かなり高度な総合雑誌的要素と、ごく一般的な実用婦人雑誌的要素を共に持つ雑誌である。しかし、その背景に注目す

ると、汪精衛南京政府宣伝部の顧問草野心平の紹介で上海総領事館囑託の身分を得た俊子を編集長とし、陸軍報道部の背景を持つ太平出版印刷公司によって出版される『女聲』には、陸軍報道部・汪精衛南京政府宣伝部・上海総領事館といった機関が関与している³⁸。したがって、編集長としての俊子が雑誌の内容を統括する際、軍部と政府の意見も考慮せねばならない。おそらくその考慮（あるいは妥協）の一端として、第一巻第五期（一九四二年九月）から、巻首に「国際新聞」というコラムが増設され、そこで戦争と大東亜共栄圏を讃えるものが多く掲載された。もっとも、その「国際新聞」は全四〇～五〇頁に及ぶ雑誌の中でも、毎号二頁の紙幅しか当てられず、文末に署名もなく、田村俊子のごまかしの態度が見て取れるが³⁹、大東亜戦争二周年記念号としての第二巻第八期にだけ、署名付きの「国際新聞」⁴⁰（図1参照）が掲載され、さらに雑誌の中央には、「大東亜共同宣言」が印刷された一頁が追加されている（図2参照）。この第二巻第八期は、『女聲』全体において最も宣伝色の濃い号であるが、まさにその号に、本稿の論究対象であり、戦争への皮肉が含まれる「注文の多い料理店」の中国語訳が掲載されたのである。この掲載は果たして偶然であろうか。俊子が自分の嫌悪する「戦争」を記念せねばならないこの号に、故意に戦争に対する批判的な読みを許す「注文の多い料理店」を載せることにより、彼女なりの抵抗を示していたのではないか。「注文の多い料理店」の戦時下ならではの特別な「役割」を見出し、「戦争」を宣伝せねばならない第二巻第八期にその「役割」を生かすため、俊子は編集長として掲載を決めたのではないかと稿者は考える。



図1

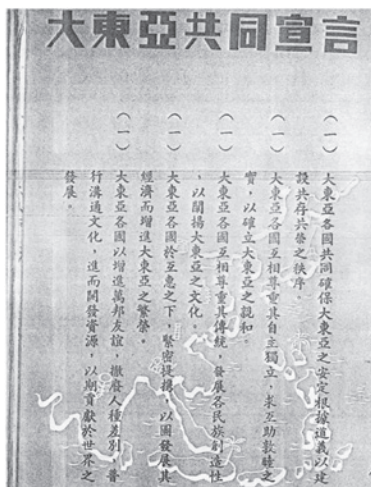


図2

おわりに

稿者の結論にしたがえば、「注文の多い料理店」をもって戦争宣伝に反意を示そうとする田村俊子の意図は、無論共産党員である関露にとっても好都合である。田村俊子がまさにその意図を関露に伝え、二人（あるいは編集者全員）で合意したうえで掲載の最終決定を下したという状況もあり得る。しかし、日本語能力という基本条件からすれば、最初の作品選定の段階で関露が関与した可能性はほぼ無に等しいと言えよう⁴¹。「注文の多い料理店」は俊子のかつての在り方を相対化するとともに、プロパガンダ雑誌のプロパガンダ号に要請されるプロパガンダ性を相対化すべく、編集長俊子によってあえてその誌面に置かれたと考えられるのである。こうして宮沢賢治「注文の多い料理店」の批判性は戦時下の中国において生かされ、場所を与えられたのである。

【注】

一九三六年以降、田村俊子は旧姓佐藤俊子を使って活動しているが、本稿では文学史の慣習に従って田村俊子という名前を使用した。

- 1 民国時代の有名な洋画家陳抱一と日本人の妻飯塚鶴との一人娘である。日中混血児である陳緑妮は、中国語にも日本語にも精通している。
- 2 「中国雑誌「女声」の文芸欄をめぐる：宮沢賢治の「注文の多い料理店」を中心に」（『九大日文』第二〇号、二〇一二年十月）と「中国雑誌「女声」文芸欄再論：上海で形成される宮沢賢治テキスト」（『九大日文』第二四号、二〇一四年十月）である。
- 3 「雨二モマケズ」が、大政翼賛会文化部が編集・弘布した『詩歌翼賛』第二輯（一九四二年三月）に収録されていた。
- 4 『女聲』のもう一人の編集者、凌大嶸による証言である。凌はさらに雑誌の管理・掲載内容などを取り仕切ったのは田村俊子であり、編集者の三人（関露・凌大嶸・趙蘊華）はただ自分の書いた原稿の編集、作成、校閲のみを担当すると語っている（塗曉華「付録一『女聲』関係人員実訪記録——一、采訪凌大嶸」『上海淪陷時期「女聲」雑誌研究』（中国伝媒大学出版社、二〇一四年三月））。
- 5 『女聲』には関露の訳文が二篇掲載されている。プーシキンの詩「バフチサライの泉」（第二巻第四期、一九四三年八月）と、イルマ・ダンカン「ダンカンの悲劇」（第四巻第二期、一九四五年七月）である。
- 6 『女聲』第四巻第一期（一九四五年六月）には W. ワシレーフスカヤの書いた独ソ戦を描く作品「虹」が掲載されている。「虹」の原作はポーランド語で書かれているが、まもなくロシア語に翻訳されたモスコウの新聞に連載された（一九四二年八月～九月）ため、ロシア語の翻訳ができる関露によって訳されたと主張する研究者もいるが（塗曉華『上海淪陷時期『女聲』雑誌研究』（中国伝媒大学出版社、二〇一四年三月））、『女聲』誌面の情報のみに注目すると、それは関露の依頼を受けた「小光」という女性が袋一平訳の日本語バージョンから翻訳したものだとし示されている。
- 7 ①宴会で他人の会話に入れないこと、②久米正雄の報告がわからないこと、③詩歌朗読を聞くととき、詩の内容がわからないが朗読者たちの溢れ出る感情から大きな感動を受けたこと、④正式会議のとき、日本人の発言には中国語の翻訳が付けられているのでわかるが、あるモンゴルの発表者はその

- モンゴル語の発言に日本語の翻訳のみが付けられたので、彼女にはわからなかったこと、⑤グループ会議に草野心平が入り、彼の発言は「明白」(わかりましたという意味)といった中国語の片言以外何もわからなかったこと。
- 8 草野心平『凹凸の道—対話による自伝』(文化出版局、一九七八年五月)
 - 9 汪精衛南京政府宣伝部の顧問という要職に就いた草野心平は、戦時下中国に渡った多くの日本知識人と緊密なつながりを持っている。田村俊子もその一人である。
 - 10 従来の研究において、中国における最初の宮沢賢治作品の翻訳は銭稻孫訳の「北国農謡」とされているが、中国近代の雑誌や新聞を収録したデータベース「全国報刊索引」に基づけば、銭稻孫訳の「北国農謡」より四ヶ月前に、白樺訳の詩五篇がすでに発表されている。
 - 11 小倉豊文・内田朝雄・栗原敦『座談会『宮沢賢治初期研究資料集成』をめぐって』(『宮沢賢治初期研究資料集成』別冊(国書刊行会、一九八七年十月))によると、一九三六年「雨ニモマケズ」詩碑ができた後、「天照皇大神」と並べて掛けて拜んでいた人もいたという。
 - 12 宮沢賢治は生前詩集『春と修羅』も自費出版したが、『春と修羅』は詩としては非常に難解で、翻訳して中国婦人向けの『女聲』に載せるのは相応しくないと考えられる。
 - 13 宮沢賢治『注文の多い料理店』内容説明(初出は宮澤賢治『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』(杜陵出版部・東京光原社、一九二四年十二月)、引用は『新校本宮沢賢治全集第十二巻(校異篇)』筑摩書房、一九九五年十一月)による。
 - 14 西田直敏「宮沢賢治の文章 序「注文の多い料理店」について」(『四次元』一三八号、一九六二年六月)、恩田逸夫「宮沢賢治「雪渡り」と「注文の多い料理店」」(『児童文芸』二四(一一)、一九七八年九月)など。
 - 15 梅原猛「宮沢賢治と諷刺精神」(『文学』三四(一二)、一九六六年十二月)など。
 - 16 恩田逸夫「宮沢賢治・注文の多い料理店」(『展望 日本の児童文学』、双文社、一九七八年五月)、恩田逸夫「宮沢賢治「雪渡り」と「注文の多い料理店」」(『児童文芸』二四(一一)、一九七八年九月)など。
 - 17 そのほか、「山猫」の由来への追究、物語の構成の巧みさ、着想の奇抜さ、ユーモア、言葉の意味の二重性、賢治の仏教思想などもよく論じられるテーマである。代表的な論文として、北野昭彦「宮沢賢治「注文の多い料理店」の〈山猫〉像 猫の民俗誌と風刺文学論の視点から読み直す」(『龍谷大学論集』四五七号、二〇〇一年一月)、西田直敏「宮沢賢治の文章 序「注文の多い料理店」について」(『四次元』一三八号、一九六二年六月)、秋枝美保「童話集『注文の多い料理店』論(上) 人間関係の問題を中心に」(『言語文化』二号、一九八四年二月)、秋枝美保「テキスト評釈 注文の多い料理店」(『国文学解釈と教材の研究』三一六号、一九八六年五月)、三浦正雄「現代の民話と仏教思想「注文の多い料理店」考」(『宮沢賢治』十号、一九九〇年十一月)などがあげられる。
 - 18 小森陽一「注文の多い料理店」(『最新宮沢賢治講義』、朝日新聞社、一九九六年十二月)、西成彦『森のゲリラ宮沢賢治』(岩波書店、一九九七年二月)など。
 - 19 五十嵐淳「「注文の多い料理店」の二項対立を超えて——須貝千里氏の読みを検証する」(『国文学：解釈と鑑賞』、二〇〇八年七月)
 - 20 丸岡秀子『田村俊子とわたし』(ドメス出版、一九七七年七月)による。
 - 21 佐藤俊子「一とつの夢—或る若きプロレタリア婦人作家におくる—」(『文芸春秋』一九三六年六月)
 - 22 『田村俊子とわたし』の中で、「戦慄すべき苦勞、蝕まれゆく農村婦人」という記事を読んだ丸岡秀子は、「ふと俊子のことを思っていた。あの本町アパートの独り暮らしの気楽さ、あのあでやかな正装の日常を、この記事でおいつめてみたい。そしてその反応をこの目でみたい」と回想している。

- 23 注 20 に同じ。
- 24 注 21 に同じ。
- 25 呂元明氏の考察によると、田村俊子の社会主義思想は社会改良主義の部類に属し、中国共産党のスパイ揭露の革命的な社会主義とは異なる。呂元明著・西田勝訳「田村俊子の中国での足跡」(『中国語で残された日本文学——日中戦争の中で』(法政大学出版局、二〇〇一年十二月)) による。
- 26 田村俊子は一九三八年十二月、中央公論社の特派員として中国に渡った。
- 27 上海にはもともとミリントン・プレスというイギリス資本の出版社があり、一九四一年日本軍上海占領後、陸軍報道部に接収された。この出版社を宣伝に使うために、一時中支軍報道部に所属していた名取洋之助に委託し、その経営を任せた。名取はその出版社を「太平出版印刷公司」と改名した。
- 28 田村俊子は長年婦人解放運動に従事しており、また「大陸通信一束」において、「私はこゝで若しかすると中国婦人の間に新文化運動を起すかも知れません」(『女性展望』、一九四〇年九月)と書いている。
- 29 草野心平「佐藤俊子さんの死」(『文芸春秋』一九四七年十月)による。関露も「私と佐藤女史」(原文は一九四五年六月の『女聲』第四卷第一期・左俊芝 追悼号に載せられ、日本語訳は二〇〇五年七月の『国文学解釈と鑑賞』別冊「今と云う時代の田村俊子——俊子新論」に載せられている。訳者は岸陽子)の中で次のように回想している：「冬には冷たい水道の水に両手をつけてお米をといでいました。それから小さなまな板の上で凍った牛肉と大根を切るのです。彼女の手はかじかんで赤くはれあがっているように見えました。そのあと、小さなコンロで火を起こし、真赤に焼けた炭を小さな火鉢の中に入れて、そのそばのソファーに坐り、手をあぶりながら自分で作った夕飯を食べるのです。」
- 30 阿部知二「花影—田舎への手紙—」(『文学界』、一九四九年六月)
- 31 佐藤俊子「カナダ便り—田村俊子さんから—」(『輝ク』、一九三三年六月)
- 32 佐藤俊子「千歳村の一日」(『改造』、一九三六年六月)
- 33 佐藤俊子「學生に贈る書」(『中央公論』、一九三八年四月)
- 34 関露「私と佐藤女史」(『女聲』第四卷第一期、一九四五年六月)
- 35 注 30 に同じ。
- 36 佐藤俊子「知識層の婦人に望む 日支婦人の真の親和」(『婦人公論』、一九三九年三月)。また「国民再組織と婦人の問題」(『婦人公論』、一九三九年四月)と「婦人の歩む民族協和の道」(『婦人公論』、一九三九年六月)の中にも、類似した態度が見られる。
- 37 一九四〇年七月二十八日、汪兆銘が「政權」を樹立した三ヵ月後、日本大使阿部信行大將を強力なバックアップにして発足した日本文化の中国浸透の中心的役割が求められた日本の国策推進機関である。
- 38 鈴木貞美・李征編『上海一〇〇年：日中文化交流の場所 (トボス)』(勉誠出版、二〇一三年一月)による。注 9 と注 27 もそうした背景に触れている。
- 39 その「国際新聞」は第二卷第十二期(一九四四年四月)から「新聞網」に改称され、政治・戦争・社会ニュースが共に二頁の紙幅の中に並べられ、百以内の文字数でそれぞれのニュースがごく簡略に紹介される形になり、戦争を讃える部分がより軽視されるようになった。
- 40 文章名は「浸淫於國際新聞中の回憶」であり、作者は「南木」と明記されている。
- 41 ただし、訳文掲載をめぐるのは、訳者である陳緑妮の存在も無視できない。この陳緑妮については、別稿を設けて論じるつもりである。